

地域に根差した美術館を目指して

高岡市美術館 館長 村上 隆

高岡市美術館は昭和26年12月、高岡市古城公園内に北陸地方唯一の公立美術館として開館した。当時のことはすでに『富山県博物館協会二十年史』等に定塚武敏元館長が記されているが、これは博物館法が施行された時期とまさに時を同じくしており、博物館とは何か、美術博物館すなわち美術館はどのような機関であり、そこで学芸員はどのような役割を果たすべきか、先例を近くにみることが困難であったにもかかわらず、着実に実績を重ねてこられた先人の歩みには敬意を表しておきたい。そのような先史を経て、当館は平成6年に現在の地に移転、リニューアルオープンし、平成26年には20周年となる記念の年を迎えた。平成元年から10年までの間、県内に新たに誕生した美術館は多く、それぞれがまた同じころ20周年を迎えることとなる。同時に多くの美術館が開館したことは、県内において美術に親しむ人びとの裾野を大きく広げることになったとともに、それぞれが地域に根ざした研究と特色ある活動を展開していく契機になっているように思う。

90年代の美術館界は、全国的に教育普及活動への関心が高く、シンポジウムなどで各地の先進的な事例が紹介された。ワークショップ、学校教育との連携、ワークシートやセルフガイドなどの教材による鑑賞教育など県内の美術館においても活動の深まりがあった。美術鑑賞のために、音楽、ダンス、文学、映画など他のジャンルを美術館に取り込むことも積極的になされた。

世紀の変わり目とともに、話題の中心は地域の活性化に移行した。成長経済の時代の終焉が意識され、人口減少、人口流出の問題が顕在化した。これらは、都市部より地域においてより深刻である。自治体存続が危うければ、自治体設置の美術館に未来はないことを、財政破綻した夕張市の例が示した。美術館が町づくり、町おこしの一翼を担うことが期待され、美術館はどのような協力が可能であるかをアピールしていかなければならない時代が到来したのである。現在の学芸員の使命は、立脚する地域の美術・工芸・文化史の記録・掘りおこしとその振興にシフトしている。美術をその歴史を見る視点そのものが、西欧の美術という「中心」と、その他「周縁」という観点に、もう納まりきれない。

平成15年の地方自治法改正により指定管理者制度が導入された。これにより、美術館評価制度の検討も大きな関心を呼んだ。美術館の運営を誰に任せるかを決

定するには、事業を評価する視点が定まっていなければならないからである。観覧者数や収入だけでは計れない如何なる価値が美術館にあるかを考えると、評価のチェックポイントは膨大なものとなる。

さて当館では、平成26年の夏に企画展「メタルズ!—変容する金属の美—」を開催、この展覧会は平成27年3月まで全国各地を巡回した。一般財団法人地域創造の「公立美術館巡回展支援事業」による助成を受けながら、金属産業と関係の深い地域の美術館・博物館と連携し、およそ2年の準備期間を経て開催に至った展覧会である。ご存じのとおり、高岡は近世以来、銅器など金属器の製造を伝統産業として発展させ、その技術は現代でも広く全国から注目を集めている。ここ10年ほどの間にも、平成15年に故・大角勲氏が日本芸術院賞を受賞、平成17年に大澤光民氏が重要無形文化財保持者（鑄金）に認定されるなど、作家たちの活躍も目まじしい。そうした地域の特色を踏まえつつ、地方から発信できる展覧会を目指したのが本展である。出発を古代とすることで、金属造形がその性質・機能（輝き、彩り、響き、堅牢性、希少性など）の活用から始まっていることを示し、それらが現代までの彫刻や工芸にどのように活かされ、価値を更新されているのか、再考していただくきっかけになったのではないかと思う。

また、当館では平成7年以来、「高岡市民美術展」や市内の小・中学・特別支援学校に通う児童・生徒の図画工作科・美術科作品を展示する展覧会が開催され、現在も継続している。平成18年度に高岡市が「ものづくり・デザイン科」を新設、さらに平成17年に県内国立3大学の統合によって市内にキャンパスを構える「富山大学芸術文化学部」が誕生し、創作に関わる新たな人口を生み出すとともに、制作発表の場を美術館に求める声が上がった。美術館が広く開放された場であるべきことには疑いはないが、美術館には情報を発信するものとしての責任がある。定例的な展覧会の開催にあたって、常に内容を見直し、ときに統合、再スタートが必要となることもあるだろう。そこで、当館では平成26年度より「ユース・アート・ミュージアム」構想のもと12月から3月にわたるシーズンの展覧会の流れを一部整理し、歴史ある「高岡市小学校連合展覧会」「拾美会展（中学校）」「ものづくり・デザイン科作品展」を「クリエイティブ・たかおか」展に統合、「富山大学芸術文化学部卒業・修了制作展」とあわせ、この時期に市内におけるすべてのユース世代の創作を集中して概観できるようにした。長年にわたり築かれてきた教育現場との連携が相互に実のある成果を結ぶよう、新しい取り組みはまだ始まったばかりである。

富山の自然：魚津水族館の役割

魚津水族館 館長 稲村 修

平成25年に魚津水族館は創立100周年を迎え、リニューアルしました。大正2年、富山県によって創設されて以降、戦争や経営難による紆余曲折を経て、現在の三代目魚津水族館は日本最古の歴史を繋いでいます。富山県唯一の水族館として「富山のさかな」を展示してきましたが、リニューアルのテーマの一つが、「もっと富山にこだわりたい!」でした。

富山は標高3000m級の北アルプス立山連峰から、日本海に面する水深1000m超の富山湾の深海まで、多様な環境がコンパクトに収まっています。富山県の東部には世界屈指の急流河川が流れ下る一方で、県西部に広がる平野部には緩い流れの河川があります。能登半島に抱かれる富山湾は日本三大深湾の一つとして、岸近くから急激に深くなっています。年間降水量が2000mmを超える富山では、陸から大量の淡水が富山湾沿岸の水面に流れ込みます。富山湾の表層には、黒潮から分かれた対馬暖流が流れる一方で、水深300m以深には水温2℃以下の冷たい日本海固有水（富山湾の深層水）が横たわっています。このような多様な水圏環境は、そこに棲む生物も多様になります。魚津水族館の対象は、この「北アルプスの溪流から日本海の深海まで」の生物です。

最近の水族館は大型化しており、イルカやシャチ、ジンベエザメなど大型生物の展示やショーが主流で、魚類が中心の魚津水族館はマイナーな存在です。しかし、世界的に動物愛護の観点や自然界での減少などの理由から、大型生物の保護に熱く厳しい視線が注がれています。水族館で飼育している生物のほとんどは、自然界から捕獲してきたもので、絶滅の危機にある生物を展示に使うのは難しくなっています。

地元の生物を中心に展示している魚津水族館でも、様々な対応が求められています。富山湾の魚などは地元の漁師さんから仕入れることが多いのですが、淡水生物は職員が採集しています。でも、ただ捕獲してくるだけなら、単なる自然からの搾取になってしまいます。そこで、普段から県内各地へ出かけて、生物調査をしています。

豊かな自然を誇っている富山県ですが、魚もカエルもその他の生物も、多くが絶滅の危機を迎えています。何処に、どのような生物が生息しており、その繁

殖の状況はどうなっているのかを知らなければ、守っていきけません。最近、動物園や水族館の中で希少種の繁殖に取り組んでいますが、これは最終的な手段であり、遺伝的な多様性を持ったまま生物を保全していくのは至難の業です。生物の大きな特徴は、環境を整えてやれば繁殖するというものですから、元々の生息地を守っていくことが重要だと考えています。理想としては、「野外で生息調査をして、保全活動を行い、その中から魚津水族館で展示する生物を採集する」といった形を考えています。今は、富山県原産のキタノメダカのの保全に取り組んでいるところです。

もともと日本の水族館は、珍しいものを見せる見世物小屋的な発想が強いといわれます。これを否定する気はありませんが、これからの水族館は自分たちで調査研究したり、他の研究者と協力したりすることで得られた知見を、うまく展示などを通して情報発信していくことが重要だと思います。そして、自分たちの身の回りにある自然を守っていきたくと思う多くの仲間を作っていきたいと考えています。富山の豊かな自然を後世に繋いでいくのが、魚津水族館の大きな使命なのです。



富山県産キタノメダカの

ふるさと教育と博物館活動

富山県 [立山博物館] 館長 高木 三郎

平成26年9月21日、3年ぶりに布橋灌頂会が行われた。平成8年の「国民文化祭とやま」で約130年ぶりに復元されて以降、癒しの文化として開催を求める声が多く寄せられ、今回で6回目の開催となった。その間、平成23年12月には日本ユネスコ協会連盟よりプロジェクト未来遺産に登録され、平成26年の8月にはサントリー地域文化賞を受賞するなど、全国的にもこの取り組みは高く評価されるまでになった。

この布橋灌頂会の開催に立山博物館は大いに関わってきた。布橋は博物館の管理下であり、博物館の施設の一つである遙望館は、布橋灌頂会の舞台の一つであった「うば堂」をイメージして作られたことから分かるように、立山博物館は布橋灌頂会の紹介だけでなく疑似体験できる施設として作られている。博物館による調査研究や紹介が地域文化の復活につながったことは、博物館に関わる者として大いなる喜びである。

立山博物館では毎年、研究紀要を発行し、企画展ごとにポリウムのある展示解説書を作成している。立山に関わる文化の研究においては、センター的な役割を果たしているという自負がある。しかし、先日の運営委員会で、学識経験者の方から、「立山博物館は立山の研究については素晴らしい調査研究の成果をあげているが、県内の歴史全体を網羅する県立の博物館がないのは寂しい」という意見が出された。全くその通りである。実際に、富山のように県全体の歴史を通覧できる博物館を持たない県は、極めて少なくなってしまった。

富山で初の県立博物館として立山博物館が建設されるに際し、県民総合博物館構想があったと言われている。置県100年に当たる昭和58年、「富山県民総合計画」が策定されて博物館等の拡充整備の項目が立てられ、それに基づき「富山県民総合博物館基本構想策定委員会」が設置された。その委員会の検討過程で、富山県民総合博物館に先立って、立山風土記の丘の活性化を図る立山博物館の建設を進めることになった。その後、バブル崩壊もあり、総合博物館構想はうやむやになっていった。

近年、県では「ふるさと教育」に力を入れている。郷土の歴史を知ることが郷土への愛着を深めることになり、このような取り組みは大いに賛成である。知

事の意向で設置された「ふるさと教育有識者懇談会」の提言報告書では、ふるさと教育の振興は社会全体で取り組む必要があり、県は、①ふるさとに関する情報を整理し、新しい情報を提供・発信する、②県民が参加する場を提供するとともに、県民が参加しやすい環境を整備する、③指導者やボランティアの育成など県民の主体的な活動をサポートする、これら三つを上手に組み合わせて取り組んでいくことが求められている、と指摘している。これら三つの取り組みを進めるためには、ふるさと教育のセンターとなる場が必要であろう。

一方で県内の市町村立の博物館や資料館などには、優れた研究成果をあげている学芸員が増えてきた。彼らの研究成果を取りまとめるセンター的な機能をもった博物館の設置を望む声が強まっている。今、新美術館の建設計画が進められているが、その次は、新博物館の建設である。その機運を醸成するためにも、歴史系に関わる学芸員には、研究成果を地域に還元し、郷土史への興味関心を高める取り組みを強化してもらいたい。



布橋灌頂会

寄稿

博物館が地域と連携して実践する「地域回想法」について

氷見市立博物館 館長 小境卓治

氷見市立博物館は、地域に立脚した地域の博物館として、昭和57年の開館以来氷見地域を中心とする歴史・考古資料、および民俗資料の調査・研究と収集・保存、公開に努めてきました。

特に、民俗資料の大半は市民から寄贈されたもので、衣食住に用いられる生活用具や、生産や生業に用いられる農具や漁獲具、民俗芸能に用いられる道具など広範囲にわたる膨大な資料の収集と保存に努めてきました。そうした資料は洗浄を行ったうえ、虫菌害防除のためのガス燻蒸を行い、整備を終えたものから館内の常設展示のなかに組み込むほか、テーマを決めて特別展の形で可能な限り公開し、地域社会への還元を図ってきました。

これらの一連の取り組みは、当館のミッションのひとつである「地域の歴史を将来の人々へ手渡す」の具体化と位置づけられます。また近年は、こうした取り組みを一步進めるため、平成23年度から「地域回想法」に取り組んでいます。

「地域回想法」とは、これまで認知症の非薬物療法として医療、介護現場で実践されてきた「回想法」のノウハウを活用し、地域で暮らす健康な高齢者の介護予防や生きがいづくりなどに結びつける取り組みです。愛知県北名古屋市での先駆的な取り組みによって、博物館が数多く収蔵する民具は、高齢者にとってとても懐かしく、見て、触れることによってお互いの会話が弾み、笑顔があふれるなどの効果が知られるようになってきました。

当館では、この取り組みに学び、氷見地域で実践可能なモデルを見出すために、介護施設や地区の老人クラブ等との連携を深め、博物館への見学や「思い出語りの会」を継続的に実施するほか、数種類の民具セットを施設へ貸し出しています。

民具の“保存”と“利用”という両立の難しい課題に対しては、保存状態が良く複数収蔵する物や、壊れにくい物、フジ箕やソウケなど現在でも生産可能なものを選んで貸出に対応しています。

当館の実践の場でも、懐かしい話が弾み、笑顔があふれる様子が伺われ、「心の健康づくり」にとっても効果があることが実感できます。また、祖父母が孫と博物館を訪れ、苦勞をしながら暮らしてきた当時に誇らしげに語り、それを興味深く尊敬の眼差しで見

上げる孫の様子も見受けられ、世代間交流をととして家族や地域の絆を再確認できるなど、「地域回想法」には多様な可能性があると思われます。

地域に立脚した小さな博物館が生き残りの道を模索してスタートした、この「地域回想法」を通じて、これまで随分と距離感のあった「博物館」と「福祉」の分野の連携、いわゆる「博福連携」が一層進むことが期待されます。北名古屋市の様な人口の多い大都市圏ではなく、少子高齢化や人口減少に悩む過疎地域でも実践できるよう、「氷見型地域回想法」を確立させ、全国モデルとなることを目指していきたいと願っています。



地元老人クラブが博物館で行った「思い出語りの会」

寄稿

客の心になりて

砺波市美術館 館長 小野田 裕司

平成26年12月、砺波市美術館では「越中真言の古刹 芹谷山 千光寺の至宝展」の関連催しとして、園城寺仏教尊像修復院仏師川口圭太氏を招き報告会「千光寺仁王像の修復について」を開催した。山門に安置されていた仁王像の劣化が進み、平成24年11月に修復院に託したのである。仁王像を解体したところ、スギとヒノキの部材を混用していることが判明。「大きな部材を彫っていったというより、細かい部材を組み、足りない部分を足していったという印象。かなりの技量を要する作り方で、当時の仏師が技を駆使したのだろう。」

この展覧会は砺波市合併10周年記念事業として、砺波市の公共施設三館が連携し、美術館では「千光寺の至宝展」、砺波郷土資料館では「千光寺と法道仙人展」、となみ散居村ミュージアムでは写真展「千光寺の四季」を開催した。ほぼ二年間の準備期間の中で美術系や自然史系の学芸員はじめ、文化財保護審議会委員などから構成されたワーキンググループは千光寺探訪に始まり、千光寺住職や仏教美術専攻の大学准教授の講演などを交え、10回余りの研修を重ねた。学際的な研修の場ともなり、展覧会は幅の広い楽しい企画展となった。今年度は高岡市美術館で博物館・美術館が枠組みを超えて連携した企画展「メタルズ！ー変容する金属の美ー」も開催されたが、このような試みはこれからも続けていきたいと思っている。

また当館では開館した平成9年より、市内の幼稚園、保育所の年長から小学校1、2年生までの全員を対象に、粘土、石膏、ダンボールなどを用いた素材体験に重点を置いた造形プログラム「子どもの造形アトリエ」を実施している。そこには「20年後には恋人と一緒に、30年後には家族を連れて美術館を訪れてほしい」という願いが込められている。

さて、館長として4年になるが学芸員資格はなく、スポーツ指導員C級の資格しか持たない館長である。ただ平成6年から3年間は、富山県教育委員会文化課芸術文化係として芸術文化の世界に少し係わる機会があった。富山県美術展覧会も主務の一つで、翌年の県展50周年に向けて公開審査などの県展改革が検討課題であった。平成7年には記念展として「県展の草創期に活躍した作家たち」を富山県民

会館で開催し、図録の資料編が私の担当であった。「審査員・運営委員一覧」、「県展開催状況一覧表（出品・入選状況等）（受賞者一覧）」を当時はワープロのオアシスで作成した。記念展出品作の中では、第1回知事賞の丸山豊一「天神様」、第3回知事賞の手塚義三郎「塀」や第9回第一賞の島正治「裏街」などが記憶に残っている。

平成8年には改革に沿った51回展が始まり、「富山県美術展覧会」の名称が「富山県美術展」にこの時変わった。この頃県内は美術館建設ラッシュの時期で、平成6年には高岡市美術館と福光美術館、平成7年に下山芸術の森発電所美術館、平成9年砺波市美術館、そして平成11年の富山県水墨美術館と続いた。文化課に在籍していた頃に採用となった学芸員たちも、いまは中堅となり活躍している。学芸員に必要なのは「1に体力、2に愛嬌、3、4がなくて5に知力」と言われるが、体力も知力もない私はせめて愛嬌でもと思っている。

江戸後期の大名茶人松平不昧公の言葉に「客の心になりて亭主せよ」とある。美術館もその時々の入館者の心に寄り添いながら、皆さんに喜ばれる美術館でありたいと願っている。

今宵は美術館3階のラウンジでジャズのコンサートがある。館長室を出演者の控室にと言われており、早めの帰宅とする。



撫で仏と子どもたち（千光寺展）

寄稿

富山市科学博物館の役割

— 自然科学博物館は何を提供し、それを保証するのは何か —

富山市科学博物館 館長 上杉俊男

自然科学の博物館というと何が連想されるのだろうか。化石・岩石や地質図、植物や昆虫・剥製の陳列？はたまた、電気や光の実験装置？これらを連想した方は少々お年を召した方だろう。動く恐竜模型、森や海岸の景観、竜巻や降雪装置、強風の体験などを連想された方はまだお若い方と想像される。プラネタリウムや天文台の大型望遠鏡が頭に浮かんだ方は、星好きな人に違いないし、写真展などを思い起こされたなら、写真好きの方だろう。多様な展示品が借り出せるなどと思われた方は学校の先生に違いない。科学に関して質問を受けつけ疑問が解消される所と思ってくれた方は、博物館を上手に利用されている方である。収蔵庫に多くの標本が保存され、その閲覧や調査も出来ることを知っている方は、博物館と強い関係を持っている人である。

自然科学系博物館の活動の基本は、自然に関する多様な資料（事物と情報）の集積と利用にある。博物館に集められた資料は博物館資料と称され、その保存整理研究と展示普及が使命とされるが、資料が全ての活動の中心であるような施設は博物館のみである。

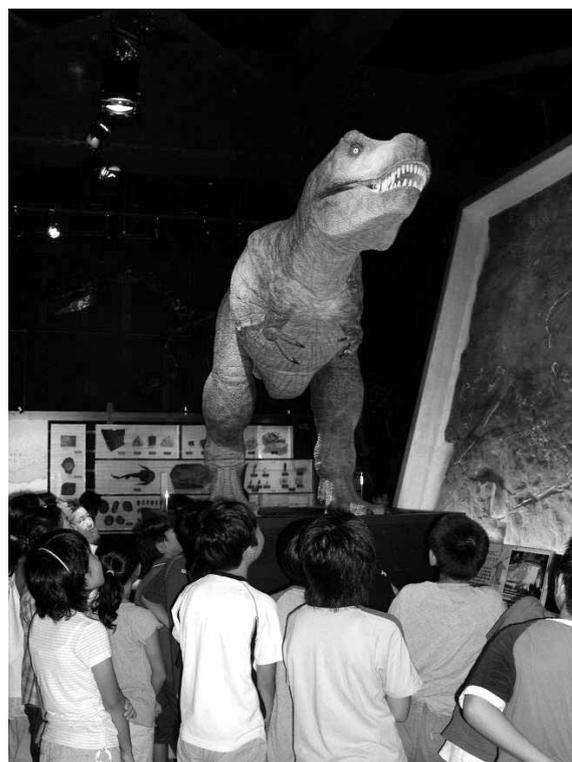
近年の自然環境の変化は急速である。北陸でもニホンジカやイノシシが急速に生息地を拡大し、外来の毒蜘蛛セアカゴケモも石川県にまで出現し富山にも出現する可能性が出てきた。一時、保全活動が活発に言われた水生の生物も、アキアカネのように著しく減少した（アキアカネは最近少しずつ回復しているようだが）。これらの変化には、温暖化に伴う変化の他、それとは異なる要因による変化も多々あり、人的な直接的影響による変化もたいへん大きい。このような自然環境の変化を捉え、その情報を提供するには変化を証拠づける資料の集積が必要である。また、自然を見る目の拡大、つまり自然を観察し記録する人々の養成や必要資料の提供も博物館活動の重要なところである。

科学技術や宇宙科学はめざましいスピードで進歩し、専門分野が高度化するとともに、目に見えず理解しにくい研究が発展するとともに、それらをわかりやすく普及することが重要となっている。天文台では、国内初である国際宇宙ステーションの観測会を始め、科学博物館でもプロジェクタを使用したデジタ

ルプラネタリウムシステムを採用し、リアルで迫力のある映像を投影できるようになった。近年では、スーパーカミオカンデで行われているダークマター研究を紹介する番組なども投影した。また、次第に身近なものとなりつつあるロボット技術についても、館外と連携しながら紹介している。

博物館の利用者は、その意識や要望が多様であり、必要に応じて当館の提供する内容も多様となる。当館の誕生以来さまざまな要因に対応し、展示や普及事業、市民との共同活動も変化してきた。これらの活動の全てを担ってきたのが、博物館の専門職員である学芸員である。当館には、天文系・物理化学系・地学系・動植物の自然系と各専門分野を担当し、資料収集整理・調査研究・普及展示を担う学芸員がいる。資料があり、専門の学芸員がいることで信頼される。この2つの要素が博物館に最も基本的な要素であろう。

富山県内では、弥陀ヶ原がラムサール条約湿地に登録され、立山・黒部をはじめとする富山県東部は日本ジオパークに認定される等、富山の優れた自然にも注目が集まっている。また、最新の科学技術を担う機関がある。資料と学芸員の充実によって、自然環境の変化、科学技術の目覚ましい進歩などに対応した、さらに充実した博物館活動が期待される。



富山市科学博物館展示室「とやま・時間のたび」